

年間授業計画

高等学校 令和7年度（1学年用） 教科 総合的な探究の時間 科目 探究と創造

教科 科 総合的な探究の時間 科目 探究と創造 単位数 1 単位

対象学年組 第 1 学年 1 組～ 3 組

教科担当者 (辻井伸江、大野健人、川上賢一郎、武田脩平、手塚博紀、茂木高志、蛭子井旭、安齋知里、田中翔大)

使用教科書 課題探究メソッド 2nd Education より良い探究活動のために (啓林館)

教科 総合的な探究の時間 の目標

- 【知識及び技能】過去の文献や資料、実験や観察、また、アンケート・インタビュー調査等の様々な方法により必要な情報を収集する。
- 【思考力、判断力、表現力等】簡単に答えの出ない問いを自ら見つけ、解決の見通しが立ち、実行可能なRQから仮説を設定する。課題とその背景を踏まえた知識体系をつかみ、客観的根拠を示した主張を自らの言葉で説明する。与えられた情報を鵜呑みにせず問いを立て、また、他者からの質問・指摘・批評を吟味し、柔軟に自説を再検討する。
- 【学びに向かう力、人間性等】活動そのものを客観的に把握し、言語化するとともに、他者に考えや思いをしっかりと伝える。

科目 探究と創造 の目標

【知識及び技能】	【思考力、判断力、表現力等】	【学びに向かう力、人間性等】
過去の文献や資料、実験や観察、また、アンケート・インタビュー調査等の様々な方法により必要な情報を収集できる。	簡単には答えの出ない問いを自ら見つけ、解決の見通しが立ち、実行可能なRQから仮説を設定できる。課題とその背景を踏まえた知識体系をつかみ、客観的根拠を示した主張を自らの言葉で説明できる。与えられた情報を鵜呑みにせず問いを立て、また、他者からの質問・指摘・批評を吟味し、柔軟に自説を再検討できる。	活動そのものを客観的に把握し、言語化するとともに、他者に考えや思いをしっかりと伝えることができる。

	単元の具体的な指導目標	指導項目・内容	評価規準	知	思	態	配当 時数
1 学期	現代社会と探究活動の授業とのかわり を学び、QCの目的について考えられ ようにする。グループ活動を通じて 計画的に行動する意義を学ぶ。メタ認 知から目標を言語化し、双方の情報伝 達を体験する。	QCの目的や、目標について一人ひ とりがグループワークを通じて考 える機会にする。グループワーク とは何か、その意義について理解 させる。	観点は、情報収集力、課題発見力、論理的思 考力、批判的思考力、表現・発信力の5つと する。積極的に探究活動に参加する姿勢やグ ループ活動による協力的な態度、学習成果の 発表やまとめの提出物の状況などの総合的に 評価する。詳細は、QCコアプログラムⅠ・Ⅱ のループリックによる。	○	○	○	2
	リサーチクエスションの設定と仮説を 立てる。	高校卒業後の進路と密接につなが る探究活動という意味づけを行 う。 自らの興味関心に基づいてゼミ分 けを行い、ゼミ毎の活動を始め る。 探究のゴールと情報収集の在り方 を学習する。		○	○	○	6
	調査・実験を行い、夏季休業中の研究 計画をたてる。	調査・実験を主体的に行う。行う 必要に応じて、研究機関、地域の 教育や福祉を担う施設や商業施設 等との連携を図り、実践的に、社 会や人々に関わる態度や行動力を 身に付けるようにする。 中間発表の準備をする。		○	○	○	6
2 学期	中間発表を行い、課題設定について再 検討する。ポスターセッションによっ て発表の構造と技法を学ぶ。先行研 究・事例を調べ、学ぶ。見通しを持 った研究計画を再考し、新たな仮説を設 定する。調査・実験を始める。	中間発表を通じて、異分野との連 携を意識するなど、創造の芽を培 う。 課題設定を再検討し、見通しを 持った探究活動の実現を目指す。 探究の手法を再度見直し、リサー チクエスションを議論し、仮説設 定につなげる。		○	○	○	8
	調査・実験を主体的に行う。行う必要 に応じて、研究機関、地域の教育や福 祉を担う施設や商業施設等との連携を 図り、実践的に、社会や人々と関わる 態度や行動力を身に付けるようにす る。 最終発表の準備をする。	仮説検証型のゼミ活動を進める。		○	○	○	6
3 学期	調査・実験のデータを得て、結果をま とめる。研究内容をまとめ、発表準備 を行う。	これまでの振り返りを整理させ る。不足していることで補えるこ とを確認し最終的なまとめに入る。		○	○	○	2
	調査・実験のデータを得て、結果をま とめる。研究内容をまとめて発表準備 を行ない、五学年合同の最終発表会で 発表を行う。	最終発表会やその準備を通して、 普遍的な探究手法への理解を深 め、メタ認知により次年度を個々 に考えられるようにする。プレゼ ンテーションの観点についても理 解を深める。		○	○	○	2
	最終発表会の振り返りをまとめる。	最終発表会やその準備を通して、 普遍的な探究手法への理解を深 め、メタ認知により次年度を個々 に考えられるようにする。プレゼ ンテーションの観点についても理 解を深める。		○	○	○	1
	1年間を振り返り、コア・プログラム Ⅲ・Ⅳへ向け、創造的な連携を模索す る。	全体発表会を通じて異分野との連 携を考えさせる。また、高等学校 卒業後の進路選択と関連づけられ そうな新たな課題設定を模索させ る。		○	○	○	2
							合計 35

高等学校 令和7年度（2学年用）

教科：総合的な探究の時間 科目：探究と創造
対象学年組 第 2 学年 1 組 2 組

対象学年組：第 2 学年 1 組～ 3 組

教科担当者： 石鍋雄大、 神尚子、 今田佳宏、 清水徳子、 森島一貴、 上野泰弘、 五十嵐麻衣、 亀田利恵子、 宮武紀加

使用教科書：課題探究メソッド2nd Education より良い探究活動のために（啓林館）

教科 総合的な探究の時間 の目標：

【知識及び技能】 テーマや問いに対する基礎知識・理解を深める。問いに近い先行研究を探し、問いに応えるための手法に
【思考力、判断力、表現力等】 与えられた情報や知識を踏まえて問いをたて、解答には答えの出ない問いを自ら見つけ、実行可能な問いと

【思考力、判断力、表現力等】与えられた情報を鵜呑みにせず問いを立て、簡単には答えの出ない問いを自ら見つけ、実行可能なRQとし

【学びに向かう力、人間性等】 指示を待つのではなく、自分が今、何をすべきか。何を行うとよいのかを自分で考え、実行する。他人任せにせず、主体的に行動する。

科目 探究と創造 の目標：

【知識及び技能】	【思考力、判断力、表現力等】	【学びに向かう力、人間性等】
テーマや問いに対する基礎知識・理解を深める。問いに近い先行研究を探し、問いに応えるための手法について理解する。文献や資料、観察実験、アンケート・インタビュー・エスノグラフィー等の様々な方法により必要な情報を正確かつ効率的に集められるようになる。	与えられた情報を鵜呑みにせず問いを立て、簡単には答えの出ない問いを自ら見つけ、実行可能なRQとして導く。また、探究手法を定めるために仮説を設定する。課題とその背景を踏まえた知識体系をつかみ、客観的根拠を示した主張を自らの言葉で論理的に説明する。他者からの質問・指摘・批評を吟味し、柔軟に自説を再検討する。	指示を待つのではなく、自分が今、何をすべきか。何を行うとよいのかを自分で考え、実行する。他人任せにせず、自分自身と向き合いながら研究を実践する。

単元の具体的な指導目標		指導項目・内容	評価規準	知	思	態	配 当 時 数
1 学 期	テーマを設定する。問いを展開しながら、リサーチクエストを導いていく。先行研究を探し、問いに対して、どのような手法を用いれば答えが出せるのかを理解する。その上で、テーマに対する見通しを立てる。	QCのテーマ設定とその見通しを立てる。ゼミ活動によって、さまざまな問いを検討し、また、その答えを見つけ、それに対する問いを展開することを通じて、テーマに対する知識理解を深める。	観点は、情報収集力、課題発見力、論理的思考力、批判的思考力、表現・発信力の5つとする。積極的に探究活動に参加する姿勢やグループ活動による協力的な態度、学習成果の発表やまとめの提出物の状況などの総合的に評価する。詳細は、QCコアプログラムⅢ・Ⅳのルーブリックによる。	○	○	○	8
	リサーチクエストを導き、仮説を立てる。根拠のある仮説を立てること。複数のリサーチクエストを検討する。予備的な情報収集を行い、探究活動全体の見通しをもてるようにする。	興味関心に基づいてゼミ分けを行い、ゼミ毎の活動を始める。輪読や対話、ワークショップなど、ゼミの特色を出した活動を通して、問いを小さくし、具体的に何を行うかを明確にする。		○	○	○	8
	社会的、学術的な意義を検討し、具体的な手法を確立して研究計画書を作成する。夏休みを利用してテーマに対する本格的な情報収集を行う。	調査・実験を主体的に行う。研究機関、福祉を担う施設、商工会議所等との連携を図り、実践的に、社会や人々と関わる態度を養う。		○	○	○	8
2 学 期	夏休み中の情報収集の結果をまとめる。ゼミ内発表を行い、各自の進捗状況を客観的に把握し、何をどのようにしなければならぬのかを判断できるようにする。論文作成のための情報収集を行う。	チェックリストによって、必要なことをピックアップし、研究計画書の調整を行う。図表など、情報の可視化を進める。		○	○	○	10
	論文作成を始める。探究手法と結果からまとめる。その際、論点整理を進める。大切なこととして、引用文献、参考文献の表記、リストづくりを丁寧に行う。	校正を行う。パラグラフライティングをチェックすること、具体的な論点が明確であるかを確認する。図表のサイズや、キャプション、単位などが適切であるか、チェックリストの項目を生徒間で評価せる。		○	○	○	14
	論文の二校を推敲し仕上げて提出する。最終発表会の準備を行う。	プレゼン資料上の作成ポイントや注意点を明示する。		○	○	○	6
3 学 期	最終発表会において、探究活動で明らかになったことを、根拠に基づいた主張として、論理的に展開しプレゼンスキル向上を目指す。また、ゼミ交流会において、深めた問いのアウトリーチと異分野連携の可能性を模索する。	論理的に根拠に基づいたプレゼン内容をつくる。発表資料においては可視化、ビジュアルライゼーションを工夫する。ジェスチャーや目線、どこを明示するか、など、聴き手の立場になることを指導する。		○	○	○	10
	高校1年生を対象に、ゼミ紹介を目的にしたワークショップをゼミ毎に行う。質疑応答や、テーマについての対話を行うことで、課題に対する見方、考え方の実際、具体的な探究手法についての理解を深める。	批判的思考力や課題発見力を向上させるためには、何が有効か。他者との連携づくり、情報収集の実際などについて、対話を通じメタ認知させる。		○	○	○	2
	学年発表会として、各ゼミ代表生徒がオーラルプレゼンテーションを行う。課題解決には多角的、多様なものの見方、考え方が必要であることを学ぶ。	2年間を振り返り、情報収集力、批判的思考力、課題発見力、連携力、論理的思考力、文章表現力などの資質能力をどれくらい高めることができたかを、生徒一人ひとりが判断し振り返る。		○	○	○	4
							合計
							70